

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2017.9) 平成28年度:47-49.

緑内障患者が手術を決断するまでの過程と治療の継続に向けての思い

宮崎 聡美, 上坂 祐衣

緑内障患者が手術を決断するまでの過程と治療の継続に向けての思い

旭川医科大学病院 8 階東病棟

○宮崎 聡美, 上坂 祐衣

目的：手術を決断した緑内障患者に対して、緑内障の診断を受けてから手術目的の入院に至るまで疾患とどのように向き合ってきたのか、また退院後どのように向き合っていくのかを明らかにする。

対象：緑内障の診断から1年以上経過し手術目的で入院した患者2名。

結果：手術を受け入れるまでの思いでは【原因がわからないもどかしさと失明への不安】
【疾患を楽観視する】
【疾患を自分なりに理解する】
【余儀なくされる日常生活と社会的役割への影響】
【早期に対処できなかった後悔】
【これまでの治療に納得できない気持ち】
【現状

を維持するために手術をせざるを得ない】の7個のカテゴリーが抽出され、継続治療に向けての思いとして【繰り返される手術への失望と恐怖】
【日常生活上の注意】
【手術を繰り返す上での先が見えない不安】の3つのカテゴリーが抽出された。

結論：手術を決断するまでの過程では、患者は早期に対処できなかった後悔や療の経過に納得できない気持ちを抱いている可能性がある。治療を継続する上では、患者が日常で工夫しながら生活できている事を評価し、社会的役割喪失や将来への不安の内容を明らかにし、支援することが重要である。

緑内障患者が手術を決断するまでの過程 と治療の継続に向けての思い

旭川医科大学病院 8階東病棟
上坂祐衣、宮崎聡美

はじめに

緑内障は、眼圧上昇などにより視神経損傷をきたす疾患であり、例え手術を受けたとしても失われた視野や視力を元に戻すことは不可能である。

日常生活に
介助が必要

他者の援助を
受けることに
抵抗

緑内障と診断された患者は不安が大きく、
この先どのように疾患と
向き合わなくてはならないのかという戸惑いがある

目的

手術を決断した緑内障患者に対して、
緑内障の診断を受けてから手術目的の
入院に至るまで、疾患とどのように向
き合ってきたのか、また、退院後ど
のように向き合っていくのかを明らかに
する。

方法

- 研究デザイン：質的記述的研究
- 研究期間：平成27年8月～平成28年1月
- 研究対象：日常生活が送れる程度の視力があり、緑内障の診断から1年以上経過し手術目的で入院した患者2名。
- データ収集方法：半構成的インタビュー形式。
- データ分析方法：面接内容は逐語録としコード化しカテゴリー化した。
- 倫理的配慮：対象者には、研究の目的・方法・著名性を確保し個人が特定されることはないこと、データは研究以外の目的には使用しないこと、データ類は厳重に管理し一定期間保管後速やかに破棄すること、本研究の参加・意思は自由であり途中辞退は可能であること、不利益が生じないことを文書と口頭で説明し、同意を受けた。

結果①

- 対象者：2名

[A氏]

60歳代、男性、既婚、
職業は運送業であったが視力障害を理由に退職、
過去に左眼1回、右眼2回、今回は右眼3回目の手術目的で入院

[B氏]

30歳代、男性、独身、事務職員、
過去に左眼4回、右眼3回、今回は左眼5回目の手術目的で入院

結果②

手術を受け入れるまでの思い（7個のカテゴリー）

- 【原因がわからないもどかしさと失明への不安】
- 【疾患を楽観視する】
- 【疾患を自分なりに理解する】
- 【余儀なくされる日常生活と社会的役割への影響】
- 【早期に対処できなかった後悔】
- 【これまでの治療に納得できない気持ち】
- 【現状を維持するために手術をせざるを得ない】

治療の継続に向けての思い（3個のカテゴリー）

- 【繰り返される手術への失望と恐怖】
- 【日常生活上の注意】
- 【手術を繰り返す上での先が見えない不安】

考察①

- 緑内障と診断を受けたとき

疾患を楽観視する



原因が分からない
もどかしさと
失明への不安

早期に対処できなかつ
た後悔・・・

後悔や自責の念を抱く

患者の疾患に対する思いを傾聴し、
思いの表出を促す関わりが必要

考察②

- 手術を決断する



看護師は、患者との信頼関係を深め、
患者の気持ちを理解し、治療の経過や今の治療に納得でき
るように支援することが重要

考察③

- 治療の継続への思い①

鈴木ら⁵⁾は、

「患者が知識や技術を習得できたり、養生法を継続できている場合、そのことを認めて
必ず肯定的なフィードバックを返す。このようなことは、患者が失った自信を取り戻し、
主体的に養生法や治療に取り組むことにつながるのである。」と述べている。

看護師は患者が自身で
日常生活上の工夫していることを
評価することが重要



患者の自信や強みにつなげることができる

参考文献

鈴木久美・野澤明子・森一恵：成人看護学。慢性期看護。病氣とともに生活する人を支える。p29-30, 2010

考察④

- 治療の継続への思い②



患者の抱えている不安の内容を明らかにし、
気持ちを支え、必要時には社会的支援が得られるよう
調整することが重要である。

結論

1. 手術を受け入れるまでの思いでは7個のカテゴリーが抽出され、治療の継続に向けての思いとして3個のカテゴリーが抽出された。

2. 手術を決断するまでの過程では、患者は早期に対処できなかった後悔や治療の経過に納得できない気持ちを抱いている可能性があるため、看護師は、患者の気持ちを理解し、治療の経過や今の治療に納得できるように支援することが重要である。

3. 治療を継続していく上では、患者が日常で工夫しながら生活できている事を評価するとともに、社会的役割喪失や将来への不安の内容を明らかにし、気持ちを支え、必要時には社会的支援を得られるよう調整することが重要である。